千葉商大論叢　第 58 巻　第 1 号（2020 年 7 月）pp. 189-199

〔資　料〕

農村ツーリズム in 岩手県花巻市大迫町の活動記録
―1 年目の成果と課題―

小　口　広　太

1. はじめに

本学は「やってみる，という学び方」という教育方針のもと，アクティブラーニング（以下，「AL」）を推進している。2015 年 4 月に開設した人間社会学部でも，「教材は人と町だ。」をキャッチフレーズに，教育カリキュラムの柱として AL の推進を掲げている(1)。

人間社会学部の AL は学生全員に参加を呼びかけ，誰でも応募ができる。毎年，4 月初旬に実施する新入生向けのオリエンテーション期間中に，AL の意義や全体スケジュールなどを説明し，その後，5 月中旬にかけて募集を行う(2)。

一般的に見ると，AL の形態は教室内でのグループディスカッション，ディベート，グループワークから体験，現地調査などフィールドワークを中心にした活動まで幅広い。人間社会学部の AL は，そのような活動を組み合わせた複合型で，なおかつ具体的なフィールドを持ち，課題を探求するという点に大きな特徴がある。

例えば，さんむ田んぼアートプロジェクト（千葉県山武市），ど根性栽培ブルーベリー・飲む果実フルーツ酢の商品開発（千葉県木更津市），真間あんどん祭り（千葉県市川市），EDOROCK MUSIC & ART FESTIVAL（千葉県市川市）などである。学生と地域住民による連携・協働の取り組みから商品開発のプロジェクトまで多岐に渡っている。

筆者は，2019 年度から農村ツーリズム in 岩手県花巻市大迫町（以下，「農村ツーリズム」）を担当している。農村ツーリズムを企画した理由は，①地方に滞在する AL が少ないこと，②筆者の専門が地域社会学で，とりわけ地域と農業の再生をテーマにフィールドワークに取り組んでいること，③筆者と現地受け入れ先のコーディネーターが知り合いだったことである。

①が農村ツーリズムを企画した最大の理由である。人間社会学部には，地域活性化や地方創生に関心のある学生が一定割合で存在する。ただし，このような学生の受け皿となる AL が少ないことに加え，泊まりがけの滞在型プログラムの場合，定員設定があり，応募者全員が参加できないという状況も生じていた。こうした経緯から，農村ツーリズムを新規 AL として立ち上げた(3)。

---

(1)　本稿で対象とする人間社会学部の AL とは，学部が主導する公募型 AL を指し，ゼミや必修の実践科目での活動は含まない。公募型 AL は教員が企画し，必要な経費は学部予算から充当される。

(2)　学生募集の方法については，これまで CUC PORTAL のアンケート機能を利用していたが，2020 年度からは学部独自で AL 専用のシラバスを作成し，学生が担当教員やリーダー学生に直接申し込むことにした。ただし，2020 年度は新型コロナウィルス感染症の影響で，前期に予定していた AL を全て中止とした。

2. 岩手県花巻市大迫町と現地コーディネーターの紹介

農村ツーリズムを実施した岩手県花巻市大迫町[(4)]は，県の中心部に位置している。ぶどうとワインの里として有名で，県内で最も古いワイナリー・株式会社エーデルワインがある。エーデルワインは町内産のぶどうにこだわり，一貫製造（搾醸，貯蔵，ボトル洗浄，瓶詰め，熟成，箱詰め）を行っている。

大迫町には，個人で起業した小規模ワイナリーもある。2019年で50回目を迎えた「おおはさまワインまつり」や全国からワイナリーが集結する「日本ワインフェスティバル」の開催など，地域内以外から多くのワインファンが訪れる。

農村ツーリズムは，鈴木寛太氏（以下，「鈴木氏」）に現地コーディネーターを依頼した。鈴木氏は1991年生まれ，東京都出身である。神奈川県にある大学に進学し，大学が主催する震災復興ボランティアで岩手県遠野市や陸前高田市を複数回訪問した。卒業後，一旦はIT会社に就職するも，個人的に岩手県を訪問するなどつながりを継続し，2015年8月に花巻市地域おこし協力隊1期生として着任した。

鈴木氏は大迫町でぶどうの生産振興をミッションに掲げ，活動に取り組んだ。農家を訪ね歩き，ヒアリングやアンケート調査を実施するなど地域農業の現状と課題を把握するとともに，「ぶどうつくり隊」を組織し，援農ボランティアの仕組みをつくった。2018年5月には新規就農し，同年7月をもって3年間の地域おこし協力隊の任期を終了した。その後，集落支援員として花巻市役所大迫町支所に勤務している。

鈴木氏は，大迫町で最も若い農家である。生食・醸造用のぶどうを栽培し，農協やエーデルワインに出荷するほか，酒類販売免許を取得し，これからはワインの個人販売を手掛ける予定である。そのほかにも，農業体験の受け入れなど都市農村交流にも積極的に取り組み，ゲストハウスの開業（民泊免許の取得）に向けて準備を進めている。

3. 農村ツーリズムの概要

農村ツーリズムには，定員5名に対して8名の応募があった。面談で動機を確認し，新幹線の団体割引やレンタカーの乗車人数などを考慮した上で，全員の参加を認めた。

参加者は1年生：3名，2年生：5名，男女比は男性：6名，女性：2名，女性はいずれも1年生で，出身地は千葉県，茨城県，東京都の関東圏であった。

事前説明会では，4つの目的と対象とする学生像を提示した（表1）。具体的には，地域が抱える課題の発見，地域資源を活かした地域づくり，若者の移住などから動く農村の姿を捉えること，様々なバックグラウンドを持つ人々との出会いと交流をつうじて異なる価値観に触れ，視野と選択肢を広げることである。

---

(3)　地方における滞在型ALについては，弘前ウェディング（青森県弘前市）が2018年度，地域プロデューサー養成プロジェクト（福井県美浜町）が2019年度をもって終了した。

(4)　大迫町は，2006年1月に花巻市と合併した。

表 1：農村ツーリズムの目的と対象とする学生像

目的	地域資源を活かした地域づくりを学ぶ
	若者が移住することの意味を考える
	生き方を見つめ直し，仕事の選択肢を増やす
	これからの都市と農村の関わり方を考える
対象学生	農村の暮らし，農業に触れたい
	農村の地域づくりを学びたい
	地方での就職，起業に関心がある
	農村への移住プロセスを学びたい

資料：筆者作成

4. 農村ツーリズムにおける学びのプロセス

農村と大学の連携には，多様な形態が存在している[(5)]。農村ツーリズムは，農村を知り，学ぶ第一歩として「事前学習→大迫町でのフィールドワーク→事後学習」という学びのプロセスを重視した（表 2）。

表 2：農村ツーリズムの具体的な流れ

日時	内容
2019 年 4 月中旬	募集の開始
2019 年 5 月上旬	参加者の決定
2019 年 6 月 18 日	事前学習会の開催，顔合わせ
2019 年 9 月 17 日-19 日	フィールドワークの実施
2019 年 9 月 27 日	第 1 回事後学習会の開催
2019 年 10 月 15 日	第 2 回事後学習会の開催
2019 年 11 月 1 日	報告書の発行

資料：筆者作成

(1) 事前学習

事前学習会は，大学に鈴木氏を招いて実施した。その目的は，①鈴木氏と参加学生の顔合わせ，②鈴木氏より大迫町の紹介，③鈴木氏より移住の経緯や現在の仕事について紹介，④現地で学びたいことの共有，⑤訪問日程とスケジュールの調整である。

事前学習会で重視したのは，現地訪問の前に活動をともにする鈴木氏と交流し，人間的な距離を縮めることであった。2 泊 3 日という短期間の訪問の場合，活動が終了する頃に

(5)　農村と大学の連携については，中塚・内平（2014）を参照されたい。

参加者同士打ち溶けることも多い。そうではなく，事前に人間関係をつくり，現地での活動が少しでもスムーズにできるようにした。学習会後は懇親会を開催し，鈴木氏も参加するLINEグループを作成するなどお互い情報交換や相談ができる体制を整えた。

また，事前に参加動機や問題意識を共有することで，農村ツーリズムが単なる旅行や観光とは異なり，参加者全員で学ぶ場であることを意識づけた。その場では筆者と鈴木氏でつくったスケジュール案を提示し，それに対する学生からの意見や要望も聞いた。「農作業を重視したいのか」「ワインについて学びたいのか」「他に訪問したい場所はあるのか」など自由に意見交換を行い，スケジュールに反映させた。

筆者は事前学習会，懇親会をつうじて学生の性格を知り，役割分担のイメージを持つことができた。農村ツーリズムは公募型ALのため，初めて会う学生が大半であった(6)。今回は，リーダーと会計を2年生から1名ずつ割り振った。

(2) 大迫町でのフィールドワーク

当日は東京駅に集合し，新幹線で新花巻駅に向かった。帰りも同じく，新花巻駅から東京駅に移動し，解散した。現地での移動手段はレンタカーで，筆者が運転した。新幹線代（往復）とレンタカー代は学部予算から充当し，学生の自己負担はコーディネーター費：9,000円（1日3,000円×3日），食費などを合わせて20,000円弱であった。

表3：フィールドワークの内容

	内容	目的
1日目	商店街散策	見学
	エーデルワイン訪問	見学
	寿司屋で懇親会	交流
2日目	花巻市葡萄が丘農業研究所訪問	見学
	鈴木氏のぶどう園で作業	農業体験
	宿泊先で夕食づくり	交流
3日目	S氏のぶどう園で作業	農業体験
	感想，学んだことの共有	振り返り

資料：筆者作成

フィールドワークで重視したのは，「見学」「農業体験」「交流」をバランスよく組み込むことと，参加者が共同で作業できる時間を確保することであった（表3）。フィールドワークでは，限られた時間のなかで多くの活動や視察などを組み込み，参加者が体力的，精神的に疲れてしまうことがある。今回は全員がフィールドワーク初心者であったため，ひとつひとつの活動に余裕を持たせるよう時間を確保した。

1日目は，商店街を散策しながら「早池峰と賢治」の展示舘，雑貨屋，パン屋を訪ね，

(6)　筆者のゼミからは，3名の学生が参加した。

大迫町の文化や暮らしについて学んだ。その後，エーデルワインを訪問し，ぶどう栽培と産地の歴史，ワイン製造の工程を見学した。2日目は，午前に花巻市葡萄が丘農業研究所で様々な品種のぶどうを試食しながら，栽培技術についてお話を伺った。その後，鈴木氏の圃場に移動し，昼食前から夕方にかけて農作業を行った。3日目は，午前にぶどう農家・S氏の圃場で，醸造用ぶどうの糖度を高めるために葉を1枚1枚手で取り除いた。

1日目の夕食は，鈴木氏と馴染みの深い寿司屋を貸し切った。2日目は全員で夕食をつくり，エーデルワインの社員を招いて交流した。

3日目の午後は，振り返りを行った。気持ちが盛り上がり，記憶が鮮明なうちに一人ひとり3日間をとおして感じたことや考えたこと，これからの活動についてコメントシートに書き留め，共有した。

このように，大迫町では頭で学ぶだけではなく，聞く，話す，身体を動かす，味わうなど五感で学ぶフィールドワークを心掛けた。

(3) 事後学習

農村ツーリズムにおける学びのプロセスは，「何を経験したのか」とともにその経験から「何を学んだのか」を重視した。ただし，この場合，商品開発や企画提案などとは異なり，目に見えるアウトプット（成果）が見えにくい。そのため，事後学習が特に重要となる。

事後学習では，貴重な経験を学びに変えていく活動として報告書の作成に取り組んだ。このアイデアは，筆者の学生時代の経験[7]と早稲田大学平山郁夫記念館ボランティアセンター（WAVOC）の活動からヒントを得た。報告書作成の意義は，体験の言語化をつうじて経験の垂れ流しを防ぐことにある（早稲田大学平山郁夫記念館ボランティアセンター編 2016, 2019）。

1回目の事後学習会では報告書の目次と執筆分担を決め，10月末に原稿提出，11月上旬に発行ができるようスケジュールを組み立てた。報告書は活動報告と参加者の感想レポートを柱に構成し，2回目の学習会で進捗状況の確認と掲載する写真の選定を行った。

報告書は完成させることが目的ではなく，学生の学びを深めるためのひとつの手段である。報告書には，2つの役割がある[8]。

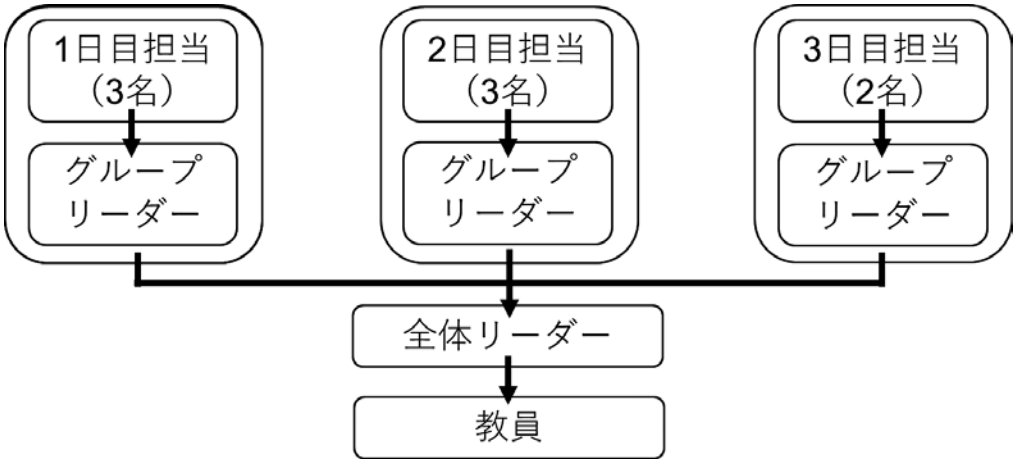
ひとつは，学びの可視化である。すなわち，現地で何を感じ，考えたのか振り返り，自分の言葉で表現することをつうじて問題意識を掘り下げていく機会となる。

---

(7) 筆者の母校・明治学院大学国際学部では，ゼミ単位で実施する校外実習という必修科目がある。筆者は南北問題，アフリカ地域研究を専攻するゼミに所属し，校外実習ではアフリカ西部に位置するセネガル共和国の農漁村に2週間ほど滞在した。帰国後は参加学生で報告書を作成し，学びの共有を行った。その経験をもとに，農村ツーリズムでも報告書を作成し，事後学習の充実化を考えた。

(8) 報告書の作成は学生に振り返りの機会を提供するとともに，多面的な役割があることもわかった。大学にとっては次年度以降，農村ツーリズムに参加する在学生向けの資料となり，オープンキャンパスでは高校生，保護者向けに学生の学びを発信する資料にもなる。現地受け入れ先には，お礼の意味も込めて送付した。報告書をつうじて学生たちの学びや姿勢を知る機会となり，次年度以降も学生を受け入れるモチベーションにつながる。担当教員にとっては改めて学生たちの学びと向き合い，プログラムのブラッシュアップにつなげることができる。

図 1：報告書作成の役割分担と流れ



資料：筆者作成

もうひとつは，学びの社会化である。感想レポートは各自で執筆したが，活動報告は 1 日ごとに担当する学生を決め，2 年生をリーダーとして配置した。グループごと原稿を作成し，全体リーダーはその取りまとめと教員への提出，学生への連絡などを担当した（図 1）。

活動報告の作成は，学生が他の学生と一緒に振り返り，作業を行った。こうした共同作業のなかで，この AL が単なる旅行や観光ではない学びの場であることを再認識し，参加者で共有する機会にもなった。

5. 学生たちから見たフィールドワークの意義

学生たちは，フィールドワークをとおしてどのような学びを獲得したのだろうか。全ての感想レポートは紙幅の関係で掲載できないが，ここでは 2 名の感想レポートの一部を抜粋した。

・1 年生（女性）

実際，人から説明を聞くだけでは分からない，自分で体験してみないと分からない事が多くあり，新たな発見も多く，考え方なども変わった 3 日間となった。

私達は 10 人で作業をしていたがそれでも大変な作業で，（中略）仕事一つとってもこれ程大変で手間のかかる事なのだと驚き，農業はかなり体力が必要で，若い人でも疲れるのに高齢者の人が作業しなければいけないと思うと大変だと思った。同時に，ここまで育てるにも相当大変な事だったと思うが，収穫や選別などを私達に体験させてくれ，仕事を任せてくれた事には，とても感謝しなければいけないなと思う。それを知って，作業に取り組むとより一層感謝の気持ちが深くなる。（中略）

果物や野菜などは，自分の目にはそれしか映らないが，こういった経験をする事で食べ物買うときも生産者の顔や苦労なども考えるようになる。

・2年生（男性）

> この3日間で学んだことは多い。このALが無ければ大迫町のことも知らず，寛太さんとも出会うことも無かった。今回このような機会を与えていただき，私たちは多くの学びを得た。そしてこれからは，私たちがお世話になった寛太さん，大迫町のために行動を起こさなければいけないと思う。
> 千葉に住む私たちに何が出来るのか，事後学習としてまずは報告書作成を行っている。これにより私たちが学んできたことが資料として残せるほかに，多くの人に読んでもらうことで大迫町を知ってもらう機会をつくることが出来る。その報告書を元に，千葉商科大学と大迫町の長期的な関わり，その手段をこれから考えていきたいと思う。
> 大学内でぶどうや関連商品の販売，大迫町のPRパンフレットを作り学生に配布，学食と連携して大迫町の農作物を使ったメニューの開発など案は考えると山のように出てくる。これらをALに参加した学生全員で話し合い，今後の活動につなげていきたいと強く思っている。

この内容と他の学生の感想レポートも踏まえつつ，学生が感じたこと，考えたことについて，次の2点から見ていく。

ひとつは，暮らしと社会のつながりである。普段，ぶどうはスーパーなどで購入する。目の前にあるのは商品としてのぶどうであり，誰が，どこで，どのような思いで育てているのか，その背景まで知ることはできない。また，農業体験では収穫体験だけで終わりというプログラムも多い。大人数であればなおさらだが，それはひとつの工程を体験しているに過ぎない。

フィールドワークのメインは，鈴木氏の圃場での農業体験であった。生食用ぶどうの収穫時期に合わせて訪問日程を組み，さらに少人数という強味を活かし，全員が「箱作り→収穫→選別→出荷」という一連の流れを体験した。作業中は，それぞれの工程の説明を受けるだけではなく，ぶどうの生育状況やぶどうづくりへの思いなども聞くことができた。

箱作りに始まり，腰を屈めながらの収穫，規格ごとの選別，箱詰めを行い，出荷の準備を進めた。出荷用に30箱ほどを完成させると，代表学生が農協の出荷場まで同行した。苦労して収穫したぶどうは，全て最上位の規格（秀）になるわけではない。ぶどうに少しでも傷や腐敗などがあれば等級は下がり，規格外は醸造用になる。農家の手取りは，その規格に応じて変化する。

農業体験ではぶどうが食卓に届くまで様々な人が関わり，手が加わり，思いが反映されていること，厳格な流通システムが存在していること，そしてこうした一連の作業をとおして自分自身の暮らしが農村や自然環境とつながっていることを学ぶ機会となった。

もうひとつは，大迫町のために行動する姿勢である。2泊3日という短い滞在であったが，人々の声に耳を傾け，交流する機会を多く設けた。その結果，学生は大迫町という地域，そこで暮らす人々の魅力に惹かれ，ファンになった。同時に，大迫町で感じたこと，考えたことを自分事として考えるようになった学生には「知る，学ぶ，体験する→行動する」という前向きな姿勢が芽生え始めている。

ALは関係人口をつくり，増やす有効な手段となる[(9)]。総務省によると，関係人口とは「移住した「定住人口」でもなく，観光に来た「交流人口」でもない，地域や地域の人々と多様に関わる人々のこと」を指す。つまり，一度訪問したら終わりという旅行や観光とは異なり，訪問した地域と関わり続け，地域外からでも多様な関わり方を模索し，行動する人

(9)　関係人口については，田中（2017）を参照されたい。

口のことである。今後，学生たちがどのような行動を起こすのか注目したい。

6. 複合型 AL における担当教員の役割

農村ツーリズムは，フィールドワークと事前・事後学習を組み合わせた複合型 AL である。このような AL で学びのプロセスをつくるにあたり，担当教員にはどのような役割が求められているのだろうか。ここでは，筆者自身の経験を振り返りたい。

表 4：農村ツーリズムにおける担当教員の役割

	役割	具体的な内容
①	体験の場をつくる	信頼できるコーディネーターとの連携
		当事者の声が伝わるようなプログラムの作成
		現地で寝食をともにできる環境の提供
②	プログラムのマネジメント	チームビルディング
		ミーティングの運営（日程調整，教室の確保など）
		基礎知識の提供
		振り返り・共有の実施（報告書，報告会）
		学生の体調管理，安全管理
③	プログラム運営に関わる事務作業	新幹線の切符手配，レンタカーの予約・運転
		学部事務課との連携，学部 Facebook への投稿
		報告書の誤字脱字チェック，印刷手配，関係者への送付

資料：早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編（2019），p.v，表 0-1 をもとに筆者作成

担当教員の役割について，①体験の場をつくる，②プログラムのマネジメント，③プログラム運営に関わる事務作業に整理した（表 4）。

まず，①はフィールドワークのプログラムづくりである。筆者は，当事者の声を伝えることができるスケジュールを組み立てた。

具体的には，農業体験の時間を多く確保すること，大迫町で活動する多彩な人々との交流である。後者について見ると，鈴木氏は地域おこし協力隊を経て新規就農した若い世代，寿司屋の店主は大迫町に U ターンした職人，S 氏は会社を辞めて 2016 年に I ターンした新規就農者である。商店街の散策でも，地域住民と触れ合う時間をつくった。商店街の店主から伺った東日本大震災時の話しや地域のために活動する姿勢は，学生に強いインパクトを残した。

農村は,「仕事がない」「高齢者ばかり」「若者がいない」など固定的でネガティブなイメージで語られることが多い。ただし，実際に農村で活動すると，そこには人々が暮らし，地域をつくり，動かしていることをリアルに捉え，これまで抱いていたイメージが大きく変わる。

フィールドワークの準備は，担当教員が現地受け入れ先とのつながりを持ち，さらにそのつながりを太くし，信頼関係を築いていくことが重要となる。その関係性の濃淡で，誰

と出会い，どのような話しができるのかなどフィールドワークの内容も変わってくる。すなわち，体験の場をつくるは，現地との関係性づくりと言い換えることができる。

農村ツーリズムを企画した背景には，前任の日本農業経営大学校在職中，2016 年に鈴木氏が筆者の研究室を訪ねたのを機に始まった付き合い関係がある。その後，2018 年 8 月に大迫町を訪問し，農村ツーリズムの企画提案を行った。農村ツーリズムの実施後は，2020 年 3 月に再度訪問し，次年度の日程候補を決めてプログラムをブラッシュアップする機会をつくった。

続いて，②は AL 全体の運営である。筆者は，フィールドワークを単に「楽しかった」だけで終わらせないよう学びのプロセスを組み立て，学生自身がプログラムを運営し，主体的に活動できる環境を整えた。

具体的には，事前学習における問題意識の共有，現地での農作業や夕食づくり，振り返り，事後学習における報告書の作成である。すなわち，プログラムのマネジメントは，学生への働きかけと言い換えることができる。

このように，教員による意識的な仕掛けが学びのプロセスには欠かせない。担当教員は，フィールドワークの単なる引率者ではない。学生が当事者意識を持つのと同じく，担当教員も AL を一緒につくり上げる当事者として，学生と同じ目線で活動に取り組む姿勢が求められる。

7. むすびにかえて

最後に，農村ツーリズム 1 年目を終えて見えてきた課題について指摘する。

ひとつは，担当教員のモチベ―ションである。農村ツーリズムのような大学内外で活動する複合型 AL はスケジュールの組み立て，フィールドワーク，事前・事後学習など年間とおして関わることが求められ，学生からの相談，表 4 に示した③のような雑務も多くなる。研究，学生の指導，講義の準備，学部・大学の運営など日々忙しくするなかで，担当教員はモチベーションをどのように維持することができるだろうか。

学生の成長をサポートする教育者としてのモチベーションはもちろんだが，AL という教育手法の意義やあり方を分析し，地域の課題と寄り添い，問いを立て，探究し，発信する研究者としてのモチベーションも両立することが重要となるだろう。

もうひとつは，プログラムの連続性である。フィールドワーク中心の AL は，現地受け入れ先を変えなければ，基本的に次年度も同じような内容を繰り返すため，プログラムがマンネリ化する可能性がある。毎年，参加学生は異なるため，繰り返しでも良いが，現地受け入れ先との関係性は単調となる。

プログラムに連続性を持たせるために，大迫町を訪問して培った問題意識を日常の学生生活のなかでも持ち続け，行動できるような仕掛けが必要ではないだろうか。農村ツーリズムは，農業や農村を知ることを目的のひとつに掲げている。報告書の作成を終えた後，2019 年 12 月 8 日に市川市で JA いちかわ協力のもと，農家でトマト苗の定植体験（ハウス），12 月 14 日には株式会社市川市場からの依頼で市川市農水産まつりに参加し，鉢花販売を手伝った。

また，大迫町と離れていてもつながりをつくり，関わり続ける企画を予定している。新

型コロナウィルス感染症の影響もあり，まだ企画段階だが，2020年度は大学内で大迫町のぶどうやぶどうジュース，チーズなど特産物を販売し，地域の情報を発信するマルシェを定期的に開催したいと考えている。これは，前述した関係人口の創出とも重なり，学生たちの大迫町のために行動する姿勢を実行に移す環境づくりといえる。

農村ツーリズムは，今後，2，3年にとどまらず，5年，10年とプログラムをブラッシュアップしながら継続していく。筆者も教育者としてこのプログラムとどう寄り添うことができるか考え，研究者としてALの意義とあり方について分析していきたい。

本稿の内容は，千葉商科大学経済研究所研究プロジェクト「産官学連携をつうじた社会課題解決型アクティブ・ラーニングの可能性（2019～2020年度，研究代表：小口広太）」における研究成果の一部である。

〔参考文献〕

小口広太「産官学連携をつうじた社会課題解決型アクティブ･ラーニングの可能性」『CUC view & vision』48号，2019年，pp.63-66

田中輝美『関係人口をつくる：定住でも交流でもないローカルイノベーション』木楽舎，2017年

中塚雅也・内平隆之『大学・大学生と農山村再生』筑波書房，2014年

農村ツーリズムin岩手県花巻市大迫町1期生「千葉商科大学人間社会学部アクティブラーニング報告書」小口広太研究室，2019年

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編『体験の言語化』成文堂，2016年

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編『ボランティアで学生は変わるのか：「体験の言語化」からの挑戦』ナカニシヤ出版，2019年

（2020.5.13受稿，2020.6.10受理）

〔抄　録〕

本稿の目的は，2019 年 9 月 17日–19 日に実施した農村ツーリズム in 岩手県花巻市大迫町の 1 年目の成果と課題の報告である。農村ツーリズムは，事前・事後学習と大迫町でのフィールドワークを組み合わせた複合型 AL で，学びのプロセスを重視した。そのため，事後学習では報告書の作成を行い，学びの可視化と社会化に取り組んだ。報告書の内容から，学生に共通する学びとして暮らしと社会のつながり，大迫町のために行動する姿勢を明らかにした。また，こうした複合型 AL を企画する担当教員の役割について，筆者自身の取り組みを振り返り，現地との関係性づくり，学生への働きかけが重要になることを指摘した。今後の課題としては，担当教員のモチベーションの維持，プログラムの連続性が挙げられる。